

〈研究ノート〉

現代ガリシア語における ヘアーダ (gheada) の後退について

浅香 武和

はじめに

スペイン北西部ガリシア自治州の公用語であるガリシア語の音声現象の一つにヘアーダと呼ばれるものがある。これは、ガリシア方言学の区分で西部から中央ブロックにおいて表れ、例えば「猫」を意味する *gato* の /g/ は有声軟口蓋閉鎖音 [gáto] が標準ガリシア語であるのに対して、[háto] のように無声咽頭摩擦音の実現として発音される現象である。ヘアーダの最新の定義は Álvarez (2002:39) に「有声軟口蓋閉鎖音の音素 /g/ の代わりに有声または無声音の実現で、軟口蓋と声門の間の位置にある摩擦または接近音の音素が存在する。実現音は /h/ でまとめることができる」とある。この定義はヘアーダの通時的音韻論からの解釈で方言学的な見地に立った最も確な説明である。

浅香 (1992) において発表した地理的な分布およびその起源についての論考から、四半世紀経過するのを機に本稿は近年の研究を精査し社会言語学的観点からヘアーダの様相を再考察するものである。

I ヘアーダのパターン

ヘアーダの研究については Fernández Rei (1990) が知られているが、ここでは Labraña-Barrero e Oosterzee (2003) が音響音声学上の見地に立った分析を行っているので、その方法を利用してヘアーダの種類を頻度順に分類すると次の表1のようになる。(発音記号は IPA に従う)

表 1

調音位置	%	40
・咽頭音[h]unvoiced pharyngeal fricatives	29, 4	
・声門音[ʕ]unvoiced glottal fricatives	24, 5	
・軟口蓋音[x]unvoiced velar fricatives	23, 0	
・口蓋垂音[χ]unvoiced uvular fricatives	19, 8	
・硬口蓋音[ç]unvoiced palatal fricatives	3, 3	

このデータは、ヘアーダが現れるガリシア西部ブロックの4地点(海岸部2、内陸部2)において、ガリシア語を母語とする50代から60代の男女から得た数値である。もう少し、詳しく分析すると表2 海岸部では咽頭音36%、軟口蓋音35%、口蓋垂音16%、声門音6%、硬口蓋音6%の順になる。表3 内陸部では声門音44%、口蓋垂音26%、咽頭音23%、軟口蓋音9%、硬口蓋音0%である。この結果から判断すると、調音点は海岸部では声門音が案外低く、内陸部では声門音が高いことがわかる。無声硬口蓋摩擦音は何れの地域でも低く、無声咽頭摩擦音が最もよく現れる。ヘアーダは均質に現れるのではなく、地理的な分布がある。

こうしたことから、次のように述べることができる。海岸部では軟口蓋から咽頭の範囲に広がる摩擦音で調音点が上部にある傾向がある。一方、内陸部では、口蓋垂から声門の範囲の音で低い調音点の傾向にある。

表 2 海岸部のヘアーダ分析

調音位置	%	40
・咽頭音[h]unvoiced pharyngeal fricatives	36	
・声門音[ʕ]unvoiced glottal fricatives	6	
・軟口蓋音[x]unvoiced velar fricatives	35	
・口蓋垂音[χ]unvoiced uvular fricatives	16	
・硬口蓋音[ç]unvoiced palatal fricatives	6	

表3 内陸部のヘアーダ分析

調音位置	%	
・咽頭音 [h] unvoiced pharyngeal fricatives	23	—————→
・声門音 [ħ] unvoiced glottal fricatives	44	—————→
・軟口蓋音 [x] unvoiced velar fricatives	9	—————→
・口蓋垂音 [χ] unvoiced uvular fricatives	26	—————→
・硬口蓋音 [ç] unvoiced palatal fricatives	0	

この分析結果は Fernández Rei (1990:163) が表す言語地図 (図1) において、海岸部のヘアーダは咽頭音 [h], 軟口蓋音 [x] が多くを占めている実現と一致する。

Fernández Rei e Carme Hermida (1996:13) におけるヘアーダ gheada の定義は、無声または有声咽頭摩擦音 (fricativa faringal) または喉頭摩擦音 (fricativa laringal) として、表記上 gh の連字を用い ghamela, cheghei, aghrú, lògho など をあげている。無声軟口蓋摩擦音 (fricativa velar) は kharnde, Kharsía, nekhro, dikhamos があり、カステラニスモとして congheladore, eghemplo, Khuan をあげている。

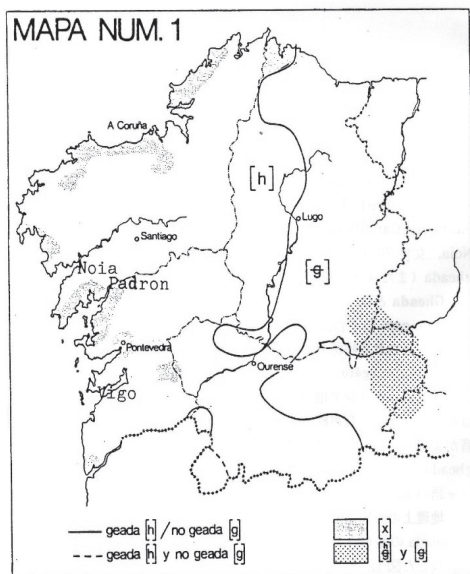


図1 ガリシアのヘアーダと非ヘアーダ (Fernández Rei, 1981) Santiago, Noia, Padron, Vigo (浅香調査 1989~1991)

図1 浅香 (1992: 88) から転載

Ⅱ イベリア半島言語地図とガリシア言語地図のヘアードの分布比較

1. Rodríguez Lorenzo (2009) は、イベリア半島言語地図 (ALPI) とガリシア言語地図 (ALG) の同一調査地点 53 ヶ所において調査語彙 agulla「針」を比べたところ次のようなヘアードの数値 (%) をあげている。

表 4

	海岸部	内陸部	等語線境
ALPI	100	86	43
ALG	100	57	14

このデータから特に注目するのは、図 2 の上部一本目の矢印付近の Covas 市と Guitiriz 市である。この二地点は等語線の左 (東側) にありヘアード地帯であるが、ヘアードの頻度が 53 % と低下して揺れていることである。さらに Rodríguez Lorenzo は 1934, 1974, 2008 の三種類のデータからヘアードの等語線を引いた図が次のように示されている。(Rodríguez Lorenzo: 2009:465)

- ・ 等語線 1934 ALPI イベリア半島言語地図作成にあたり Aníbal Otero の調査結果から引かれたもの。
- ・ 等語線 1974 ALG ガリシア言語地図 III の調査結果から Fernández Rei が画定したもの。
- ・ 等語線 2008 Rodríguez Lorenzo が調査し画定したもの。

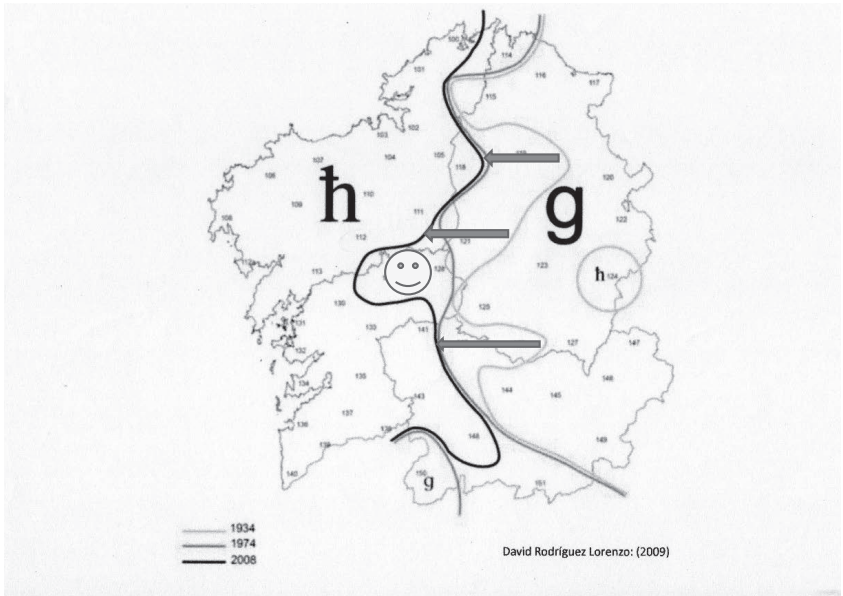


図 2

この地図から、74年の間でヘアーダの等語線が西に20kmから50kmの範囲で漸進していることがわかる。すなわち、ヘアーダは明らかに後退しているといえる。(矢印とスマイルマークは筆者による)

2. サンティアゴ・デ・コンポステーラ市周辺のヘアーダ

図2において等語線が西に突起した地域はサンティアゴ・デ・コンポステーラ市周辺(以下、サンティアゴ周辺と記す)である。筆者が描いたスマイルマークの地域が非ヘアーダ地域になっていることが注目すべき点である。ここでスマイルマークの地域のヘアーダの後退を考察してみたい。

Fernández Rei e Carme Hermida (1996) にサンティアゴ周辺の Teo 市, Oroso 市で採集した録音データがあるので、その資料を精査すると *cheghaba*, *digho*, *vighilaban*, *algho*, *lògho*, *díghar* のようにヘアーダをパーセンテージで表すことは出来ないが確認はできる。しかし、この地域はヘアーダ地域にもかかわらず *pingando* [pingándo] のように非ヘアーダを使っている例もある。

サンティアゴ周辺地域の研究は、Dubert (1999) と Dubert (2006) があるので、その調査結果のデータを利用する。

まず、Dubert (1999) の調査結果をまとめると、次のようになる。

表 5

a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
100	100	96	95	94	94	91	88	85	79
k	l	m	n	o	p	q	r	s	t
77	58	35	29	17	14	12	10	10	4
u	v	w	x	y					
3	2	1	0	0					

インフォーマント a～y の異なる 25 ケ所の数値 (%) である。平均 43 % である。ヘアーダ使用率はインタビューしたなかで、ヘアーダの現れる環境の語数からヘアーダ使用と非ヘアーダの割合を算出した数値である。

ヘアーダは [x] ～ [h] のバリエントがみられる。例えば、「後で」を意味する logo は [louqo], [lɔxo], [lɔho] のバリエントが検出され、「猫」を意味する gato は、[gato], [o'ɔqato], [hato], [xato] 等が検証されている。

これらのバリエントはサンティアゴ市以外からの定住者と老年層にみられる。50 % 以下のデータを示すインフォーマントは、都市部の人と若年層または都市で生活していたが移住した者に見られる。こうしたことから [x] ～ [h] のタイプのヘアーダは地方固有性と年齢層の特徴を表している。

Dubert (1999:72) によると、ヘアーダが失われる要因はカスティーリャ語の影響によるものであるが、/g/ の復活は内的運動ではないとしている。ヘアーダの等語線は東部から西部に移動している。従って、隣人の話し言葉による影響は少ないとみる。むしろ、サンティアゴ市から離れば離れるほどヘアーダは存在している。ヘアーダを排除することが標準ガリシア語につながるわけではない。つまり、ヘアーダの後退は実際のところ青年層が規範化のプロセスに則ったように考える。1981 年ガリシア自治州憲章によりガリシア語は公用語となり、さらに 1983 言語正常化法の施行によりガリシア語の教育が義務付けられたことによるものであろう。ヘアーダを避けることを推進するのは、標準ガリシア語の重圧だけではない。同様に、ヘアーダを避ける傾向は標準ガリシア語の制定以前に始まっていたはずであろう。また、小都市と若年層に見られるガリシア語を正しく使用するという強い考え方がカステラニスモ(カスティーリャ語からの影響)として有声軟口蓋閉鎖音 [g],

有声軟口蓋接近音 [u] が新しく入ることを促していると考ええる。

ここで注目すべき点は [u] の音である。Rogueira (1998) によると [g] は語頭、または n の後に実現するとして、gorro [goro], canga [kanga] をあげている。他の環境では [u] が現れ、algo [aluɔ], a gana [a'ɣana] の例をあげている。2つの音 [g] と [u] は相補的な関係にある。ここに Dubert (1999:51-52) の採集の一部を音転写すると、[se falas powko **u**aleuo (**galego**) | … dis **u**ato (**gato**) | e ow ðis **x**ato (**gato**) | en **alu**uus (**alguns**) kaso si| ke ðiʃera **ax**ora (**agora**) em beθ ðe ðeθir **au**ora (**agora**)] ようになる。有声軟口蓋接近音 [u] は新しいタイプのヘアーダと理解したい。太字と () は筆者による。

次に Dubert (2006) の調査結果は次のようである。この調査は Dubert (1999) に発表した論考で行った地域と同じサンティアゴ市周辺であるが、インフォーマントは同一者ではない。

a	b	c	d	e	f	g
99.03	94.59	94.12	91.84	90.43	89.63	85.66

h	i	j	k	l	m	n
79.41	65.39	30.30	23.2	13.89	12.94	11.4

o	p	q	r	s	t	u	v
7.62	7.14	5.08	4.62	4.5	3.33	0.66	0.57

ヘアーダの比率が低い地域は、都市部の話者または都市生活者の若者層である。すなわち、都市で働いているか勉強している者である。一方、ヘアーダの比率が高いのは都市近郊部または田舎の地帯であり、肉体労働者または農業従事者である。興味深い点は f と p は同一地域であるが、インフォーマントは異なるばあいである。二人は都市近郊に住む 60 代の女性である。話者 f は農家の娘、話者 p は商人の娘で都市に出て勉強した。結果は、明らかのように都市部での生活経験がある者は数値が 7.14% と低く、それに対して田舎の生活様式者はヘアーダ使用の数値が 89.63 と高いことがわかる。しかし、自由な会話や親しいもの同士の話の中にはヘアーダの使用は高まるものと予想される。都市部のフォーマルな会話の中ではヘアーダは消えていく。しかし、調査地点 a は 80 歳の農家の女性でヘアーダを避ける素振りほとんどなく 99.03% という高い数値であり、一方、調査地点 v は理髪師と結婚

した80歳の女性はほとんどヘアーダの使用は無い。生活環境の違いによりヘアーダの使用の差異が認められると考える。実際、jの調査地点では話のスタイルの意味あいによりヘアーダが時々使われる例もある。

Ⅲ 考察

Dubertの2つの調査結果から判断すると、Rodríguez Lorenzo (2009)で示した現在のサンティアゴ市周辺のヘアーダの等語線は修正すべきであろう。Dubert (1999)による平均43%というヘアーダ使用数値は、Dubert (2006)では24.89%となっているように、今後さらに減少されると予想される。

筆者は、1990年代から現在にわたりサンティアゴ市近郊の調査を続けている。その実感を述べると、サンティアゴ市に近接するアメ市ベルタミランス区オ・インストゥルメント地区 (Ames, Bertamiráns, O Instrumento) では、その土地に先祖代々住んでいる50代後半の女性マルガさんはgato [háto]のようにヘアーダ使用者である。60代女性のクリスティーナさんはサンティアゴ出身で商店に30年以上働いていたことからカスティーリャ語とガリシア語の二言語併用者で非ヘアーダの話者である。ルーゴ県の非ヘアーダ地域ポンテノーバ市出身で70歳の男性コンデ氏はgato [gáto]のようにヘアーダの使用はない。

インフォーマント調査において、人々はフォーマルな会話ではヘアーダを避ける傾向にあり、インフォーマルな会話はカスティーリャ語を修正したモデルかガリシア語に切り替える。つまり、社会言語学の用語を使うと表層言語がカスティーリャ語で、深層言語がガリシア語である。

ヘアーダがサンティアゴ市近郊のガリシア語から消えていく理由は、カスティーリャ語のなかにヘアーダが存在しないことによる。音素 /g/ の導入はカスティーリャ語の中にある音素をガリシア語に適応させて再生したと考える。ヘアーダの後退のプロセスは、連鎖的要因とカスティーリャ語の影響と考えたい。ヘアーダを避ける能力というか必要性は、ガリシア語にもカスティーリャ語にも作用して、カスティーリャ語の音声体系の範囲内でガリシア語のヘアーダを確実に撲滅しようとしている。いずれにしても、カスティーリャ語を話す能力と非難された音声現象(ヘアーダ)を払拭する力の間で認知的葛藤が生じていることである。サンティアゴ市近郊における状況は、ヘアーダを伴ったガリシア語、カスティーリャ語からの影響による非ヘアーダのガリシア語、そしてカスティーリャ語化の三本の道が交錯して進んでいく

と考える。公式の場で標準ガリシア語が使われ一本化していくことが理想である。

18世紀後半にヘアーダの使用が文献に確認されてから、250年ほど経つがレアル・アカデミア・ガレーガ(ガリシア翰林院)のレゲイラ氏は「若者たちがガリシア語固有の形態(ヘアーダ)を守ることを賞讃するが、一方ではガリシア語の規範を守るべきである」と*La Voz de Galicia*紙の記事(2014.10.25)“ghaleghos e orghullosos de selo”のなかコメントしている。

おわりに

ヘアーダの後退の社会的要因は、次にあげる点にある。

- ① 言語正常化法により学校教育において、若者層が規範とする標準ガリシア語を受け入れたこと。ガリシア語使用の規範意識を持ったことによる。
- ② ヘアーダの使用が恥辱または不名誉(estigmas)と考えられていた中産階級の人たちが、フォーマルなスタイルにおける会話の時は、ヘアーダの使用を避ける傾向になったこと。

このように、ヘアーダの現況は明らかに若者層の間では方言の変異として捉えられ、ヘアーダはゆっくりと後退していく傾向にある、と言える。

参考書目 Bibliografía

浅香武和(1992):「ガリシア語の音声現象 gheada」『麻布大学教養部紀要』25号, 87-101.

Álvarez, Rosario e Xosé Xove (2002): *Gramática da lingua galega*. Vigo, Galaxia.

Dubert García, Francisco (1999): *Aspectos do galego de Santiago de Compostela*. Verba Anexo 44, Universidade de Santiago de Compostela.

Dubert G., F. (2006): “Gheada e castelanismos con /x/ no galego de Santiago de Compostela”, *I Encontro de Estudos Dialectológicos. Actas*, Ponta Delgada, 137-160.

Freixeiro Mato, Xosé Ramón (1998): *Gramática da lingua galega I, Fonética e fonoloxía*. Vigo, A Nosa Terra.

Fernández Rei, Francisco (coord.) (1990): *Atlas Lingüístico Galego. Vol.I.I.- Morfoloxía verbal*. A Coruña: Instituto da Lingua Galega, Pedro Barrié de la Maza.

Fernández Rei, Francisco (1990): *Dialectoloxía da lingua galega*. Vigo, Xerais.

Fernández Rei e Carme Hermida (1996): *A nosa fala, Bloques e áreas lingüísticas do galego*. Santiago de Compostela, Consello da Cultura Galega.

- González, Manuel (coord.) (1999) : *Atlas Lingüístico Galego. Vol.III-Fonética*, A Coruña: Instituto da Lingua Galega. Pedro Barrié de la Maza.:
- Labraña-Barrero, Sabela e Carlos van Oosterzee (2003) : “An Acoustic Approach to Galician Gheada”, *15th ICPHS*, Barcelona, UBA, 945-948.
- Regueira, Xosé.Luís (1996): “Galician”. *Journal of the International Phonetic Association*, 26 (2): 119-122.
- Regueira, X. L. (Coord.) (1998): *Os sons da lingua*. Vigo, Xerais.
- Regueira, X. L. (2010) : *Dicionario de pronuncia da lingua galega*. A Coruña. Instituto da Lingua Galega, Real Academia Galega,
- Rodríguez Lorenzo, David (2011) : “A gheada, un fenómeno innovador do galego. Evolución diatópica no século XX”, *XXIV Encontro Internacional da Associação Portuguesa de Linguística*, Lisboa, APL, 453-465.
- Suárez Quintas, Soraya (2015) : “O galego non é o ghallego que falamos nós: A percepción e as actitudes como condicionantes do cambio lingüístico”, Simposio ILG 2015, Universidade de Santiago de Compostela.